

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イタリア語における性 (gender) について <論文>
Author(s)	古浦, 敏生
Citation	広大言語 , 9 : 1 - 5
Issue Date	1969-12-23
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046331
Right	
Relation	



イタリア語における性 (gender) について

古 浦 敏 生

§1 序

イタリア語 (Ital・で示す) は、フランス語 (F・で示す) と同様、男性 (m) で示す) と女性 (f) で示す) の2つの性しか持っていない。即ち、その源であるラテン語 (Lat・で示す) の中性 (n) で示す) は消失し、その大部分は m) になり (e.g. Lat. pectus「胸」n) > Ital. petto (m)、その一部は現代 Ital. 諸方言において f) になつたのである (e.g. Lat. fel「胆汁」n) > リグリア方言 fé(f))。性は、名詞、形容詞、分詞、代名詞、等に関係しているが、本稿では名詞に限定して、その問題点、並びに、面白そうな現象を記すことにする。②

§2 性を通して見た名詞の分類

Tinto, E. の分類によれば、名詞は次の4種に分けられる。

(1) nomi generici 「一般名詞」

これは、(m) と (f) の両方にまたがる概念を持つている名詞で、e.g. cervo「鹿」、等がそれである。これは語尾変化によつて雌雄を示すものである。(即ち、cervo「雄鹿」: cerva「雌鹿」)。^④

(2) nomi specifici 「特殊名詞」

これは、(m) (f) のどちらか一方に限られている名詞で、e.g. m) に限られている marito「夫」、(f) に限られている moglie「妻」、等がそれである。^⑤

(3) nomi ambigenere 「両性名詞」

これは、同じ名詞で (m) も (f) も示すことができるものを言う。但し、sex の差を示す際には、他の語 (形容詞、等) が付加される。^⑥ e.g. mosca「蠅」は、雄を示す時には la mosca maschio, 雌を示す時には la mosca femmina となる。

(4) nomi neutri 「無性名詞」

これは、いわば、ゼロの sex を示す名詞で、e.g. orologio「時計」m) 等がそれである。

§3 同じ形態でありながら2つの性を持つ名詞

これは3つの段階に分けられると思う。

(1) 性の差によつて意味の差を明確に示している場合。

e.g. il capitale 「資本」 (m): la capitale 「首都」 (f); il fine 「目的」 (m): la fine 「終り」 (f).

(2) 性の差によつてわずかながら意味のニュアンスが異なる場合

e.g. il carcere 「牢獄」 (m) は苦痛のニュアンスを伴うが、la carcere 「牢獄」 (f) は場所的なニュアンスを持つている。

(3) どちらの性を用いても、それほど意味の差を示さない場合

e.g. il palude 「沼沢地」 (m): la palude 「沼沢地」 (f); il trave 「桁」 (m): la trave 「桁」 (f).

§ 4 性の分化した名詞

これは、もとを正せば同じ一つの語であるのに、それが性の異つた2つの語に分化したため意味の差を生じた名詞のことである。e.g. buco 「穴」^⑧、「暗い小室」 (m): buca 「穴」、「谷間」^⑧、「墓穴」 (f); cero 「大型の蠟燭」 (m): cera 「蠟」 (f); posto 「場所」 (m): posta 「郵便局」 (f).

§ 5 内容と外形の問題

(1) 意味内容は (m) であるのに、外形 (名詞の形態、即ち -a に終つていること、と性) は (f) である名詞

e.g. birba 「ずぼらな男」 (f), guardia 「警備隊」 (f), recultá 「新兵」^⑨ (f), sentinella 「番兵」 (f), vedetta 「哨兵」^⑨ (f).

(2) 意味内容は (f) であるのに、外形 (名詞の形態、即ち -o に終つていること、と性) は (m) である名詞

e.g. contralto 「コントラルト歌手」 (m), soprano 「ソプラノ歌手」 (m), mezzosoprano 「メゾソプラノ歌手」 (m).^⑩

§ 6 suffix を付けたために性が異なる名詞

(f) 名詞に拡大詞 -one を付けたために (m) になる名詞として、e.g. donna 「女」 (f): donnone 「大女」 (m); stanza 「部屋」 (f): stanzone 「大部屋」 (m).

§ 7 男性名詞と女性名詞との差

最後に(m)と(f)の差を考えてみよう。これらが雌雄を表わすのに役立つことは言うまでもないが、このほかに次の点が指摘できよう。

- (1) 抽象名詞では、(m)は絶対的概念(*il concetto dell'assoluto*)を、(f)は相対的概念(*il concetto del relativo*)を示している。

e.g. *il vero* 「絶対的の真実」 (m)は、概念的にこれ以上分割できない大きなものを言う。したがって、*i veri* という複数形は存在しない。これに対して、*la verità* 「相対的の真実」 (f)は、概念的に分割できる小さなものを言う。したがって、「歴史的に正しいとされていること」は *la verità storica* として表わされる。そして、この *verità* は複数でも現れる。(cf. *il gaudio* 「絶対的の喜び」 (m): *la gioia* 「相対的の喜び」 (f).)

- (2) 具象名詞では、(m)は一般的な意味(*significato generico*)を、(f)は特殊な意味(*significato specifico*)を示している。

e.g. *spillo* 「ピン」 (m)は、どんなピンでも含みうる一般的な意味を持っている。それ故、概念的に大きい。一方、*spilla* 「ネクタイピン」 (f)は、ピンの一種である。それ故、概念的に小さい。(cf. *canto* 「歌」 (m): *canzone* 「民謡」 (f)).

§ 8 おわりに

本稿では、性の現象のごく一部を記すに留つたが、要するに、(m)は大きくて、一般的、絶対的で、分割できない概念に用いられやすく、(f)は小さくて、特殊で、相対的で、分割可能な概念に用いられやすい、もちろん、このほかにも要因はあるが、これらは主要なものであると言えよう。

①

(注)

- ① Lat. の(n)名詞は、ロマンス諸語ではどうなつてゐるのか? e.g. Lat. *mare* 「海」(n)は、F. では *la mer* (f), Ital. では *il mare* (m) (尤も、Ital. 中世のテキストでは(f)も現れる。)となつた。なぜ(f)となつたのか? であるが、これは「海」の反意語である Lat. *terra* 「陸」が(f)だつたので、それに引かれたとする説もあるし、また、「海」は「水」であるので、Lat. *aqua* 「水」(f)に引かれたとする説もある。いずれにせよ、この種の例を多く集めれば、ロマンス諸語の個々の特徴が現れよう。

- ② このほか、アラビア語では、動詞にも(m) (f)があるし、トカラ語では、人称代名詞の1人称にも性の差がある。
- ③ Tinto, E.: Grammatica Scienza Esatta 「正確な科学としての文法」, 1959, Roma.
- ④ 語尾変化によつて sex の差を示す現象は、ドイツ語で Motion と呼ばれる。cf. Lat. deus 「男神」 (m): dea 「女神」 (f)。これは(m)から(f)が派生した例であるが、逆に、(f)から(m)が派生した例として、英語 widow 「未亡人」 (f): widower 「男やもめ」 (m)。
- ⑤ 換言すれば、これは、異つた語幹で sex の差を示す名詞でありこの現象はドイツ語で Heteronomie と言われる。これは、近親関係を表わすもの(e.g. Lat. pater 「父」 (m): mater 「母」 (f))、「男・女」という表現(e.g. ドイツ語 Mann 「男」 (m): Weib 「女」 (f))、動物名(e.g. Lat. taurus 「雄牛」 (m): vacca 「雌牛」 (f))、等に多く見られる。
- ⑥ cf. 英語 he-goat 「雄山羊」: she-goat 「雌山羊」。このほか、(f)の方にのみ他の語が付加される例として、e.g. F. femme professeur 「女性の教授」, Lat. Ligus mulier 「女のリグリア人」, 古代アイルランド語 dea 「男神」: ban-dea 「女神」。
- ⑦ この種の名詞を多く集めてニュアンスの異り具合を調べれば、(m) (f)の特徴が現れると思われる。
- ⑧ ここで問題になるのは、Lat. における分化する以前の本来の意味が(m) (f)のうちのいずれに残っているか?ということである。この際、Lat. における性も問題にせねばなるまい。
- ⑨ これらは、男子だけが就く軍職であるのに、なぜ(f)となつているのか? Battaglia, S& Pernicone, V. の文法書は、「長い伝統を通じて」(Per lunga tradizione) として逃がっている。また第2次世界大戦では少なからぬ女性が軍役に就いたことをも述べているが、これでは説明になるまい。これは、恐らく、「男が従事すること」よりも「職業であること」に重点が置かれて、無理に(m)にしなくてもよいと判断されたのではあるまいか?しかし、時代の経過とともに、本来の sex が勝利を得て、元来(f)であつた F. recrue 「新兵」は(m)としても用いられている(Wartburg, W. von : Einführung in Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft, 1962)。
- ⑩ これは、la soprano と(f)で用いられることもある。
- ⑪ (m)は、人間的で能動的なものとされている。
e.g. Lat. ignis 「火」 (m)(リトワニア語、ロシア語も同様)は、ギリシャ語

p̄yr (n) (ウンブリア語、ドイツ語も同様)と異り、活動的な「火の神」をも示していた。これに対して、(n)は、真に物質として把握されていた。

「ニーベルンゲンの歌」の悲劇性とハゲネ

運命からの逃避を死以上に嫌い、運命のほの暗い深淵をのぞきながらも、この押え難い力の前に、己れのすべての苦悩と死とを深く甘受するゲルマンの民族性を、素朴な言葉と力強い表現で、余すところなく描きあげている「ニーベルンゲンの歌」に— 9516行にも及ぶこの叙事詩に数々の英雄や女傑が立ち現われるなかで、その性格のニュアンスとその行為の意義において、またそのゲルマン気質の現われにおいて、ひいてはこの国民的叙事詩に英雄の心の機微と死の旅への契機を与えている人物ははたして誰れであろうか。

この長編の英雄叙事詩は、ブリュンヒルトのクリエムヒルト及びジーフリトに対する復讐を重臣ハゲネが為し、クリエムヒルトのハゲネに対する復讐をクリエムヒルト自身がなし遂げている。この二つの復讐を軸として筋は劇的構成をなし、悲劇的破局への高まりを辿つてゆく、復讐が一裏返せば、主君の妃に対するハゲネの忠誠心であり、夫に対するクリエムヒルトの広い意味での貞節であるが——復讐を招いて、ブルゴンド一族の全滅に至る過程で、極めてその性格が複雑で深みに富み、その行動が果敢でしかも思慮深く、筋の展開の推進力となつているのは、グンテルの臣下ハゲネである。ハゲネこそこの叙事詩の悲劇性が高まれば高まるほど、その性格と行動に重みの加わってくる人物は外にない。

ジーフリトはニーデルラントの王子として高貴に生まれ、高貴に育ち、武力においても礼節においても彼に優る者はなく、戦争に立てば常に最大の手柄をたて、人を疑う邪心も持たず、妻を心からいつくしみ、明るく素直な一本調子の英雄として描かれている。生き味の人間としての魅力を欠いている。彼は完全無欠なのである。それだけに彼は罪の意識のないまゝに二つの罪を犯してニーベルンゲンの禍の元凶を作つてしまう。つまり、ブリュンヒルトは三つの競技において彼女を打ち負かした勇士とのみ結婚することとしていたが、グンテル王を彼は助けてブリュンヒルトを負かしたと、他の一つは夫となつたグンテル王と床を共にしようとしないうブリュンヒルトを欺いたのである。止せばよいのに彼は妻クリエムヒルトに第二の事件のいきさつをもらし、その証拠の指輪と腰紐を